

# アーチルニュース ちえなっぶ

発行元：仙台市発達相談支援センター 〒981-3133 住所：仙台市泉区泉中央2丁目24-1  
 TEL：022-375-0110 FAX：022-375-0142 e-mail：archl@luck.ocn.ne.jp  
 http://moc.istu.jp/n\_town/hattatsu/index.html

## 「つながる・連携する」 ということ

今週、2つの会議を開催した。1つ目は福祉施策担当者や教育関係者が参加し自閉症の方に必要なサービスはなにか、どうすればニーズに応えられるかを話し合った。2つ目は病院主治医らと地域での受け皿となってほしい関係者との支援ネットワークをつくるための会議である。いずれにも保護者も参加しニーズを表明し提案を行った。

保健・医療・福祉・教育の領域のサービスはそれぞれ分かれておりサービスの提供方法や利用するための手続きも異なる。また保健・医療・教育はすべての人を対象とするが、福祉は一部の人々を対象としてきた。そのためにスティグマ（負い目）を感じる人もおり必要なすべてが積極的に利用するとは限らない。だからこそタイミングよく支援を届けていくために各領域が連携できる地域ケアシステムが必要となる。このシステムは、「支援ニーズを持つ人」「支援する人（サービス提供機関）」とこれをつなぐ「ネットワーク」とからなる。このネットワークの中でニーズがキャッチされ目標が共有されそれぞれが連携し活動を展開することが求められている。

またサービスを提供する機関同士もつながる必要がある。各機関が積極的に、迅速に方針を決定し連携していけるためには、日々の活動でニーズをキャッチするスタッフの姿勢が重要な鍵となる。ネットワークの中でそれぞれのスタッフ同士が顔の見える関係となり

連携し前向きの活動ができてくると、1つの機関ではできないことにも互いにアイデアを出し合いチャレンジできるようになる。このような異なる機関同士の連携もネットワークのなかでこそ可能となる。

今回の「ちえなっぶ」は学齢期の特集である。学齢期においても抱える事情によっては医療や福祉の支援も必要となる。学校も他の領域とつながることの必要性は他のライフステージと変わりはない。地域ケアシステムの最終目標はともに住みやすい地域をつくることにある。この目標の下では、ニーズを持つ人も支援者も市民という立場において対等な関係となる。連携するための機会・場をつくることもアーチルの大切な役割と考える。「つながる・連携する」ことの意味は、ネットワークに参画する人々（当事者・支援者・機関）の新たな可能性を開くこと・エンパワメントにある。

発達相談支援センター所長 末永カツ子



\*ちえなっぶは「前を向いて」の意味です。

# 特集 学齢期!

～互いが支え合える関係づくりを目指して～

学齢期はその生活の多くを学校で過ごすこととなります。子ども達が個性を発揮して生き生きと過ごすためには一人ひとりがよく理解されて、周りの人とのかかわりの中で自己実現していく必要がありますが、日々の暮らしにくさを家族だけで受け止めていくのは大変なことです。アーチルでは、本人やご家族の発信を受け止め、支援に必要な関係機関(教育、福祉、医療等)が互いに支え合える関係づくりを目指して相談にあたっています。

## 保護者からのメッセージ

- 同じ立場の保護者達との交流は大きな支えになる。(小1女兒・特殊学級・父)
- 担任とアーチルが連携することで子どもの理解が深まり、よい状態で過ごしている。(小4男児・普通学級・母)
- 学校内での引き継ぎを十分にやって欲しい。対応の方針が一貫していると子どもも混乱しない。(小6男児・普通学級・母)
- 子どもが二人とも自閉症。学校生活も大切だが毎日の家庭生活をどう過ごすかが一番。コーディネーター的な存在がいて欲しい。(小5男児・特殊学級・母)
- 学校側が親の思いや意見を真剣に受けとめてくれる。これからも親参加型の学校であって欲しい。(中2男児・養護学校・母)

こんなことで困ってませんか?  
～小学校から高校まで特に多い相談内容～

たとえば..

### ●発達状況の確認

アーチルには相談員のほかに発達全般をみる「心理」、主に言語面をみる「言語聴覚士:ST」、運動面をみる「作業療法士:OT」「理学療法士:PT」がいます。相談内容や本人の状態によってチームを組み、かかわり方のアドバイス、情報提供等を行ったり、囑託医師による医療相談を実施しています。

## こんなことができます!

### ●コーディネーターとして

本人の問題だけではなく家族の方の心配事についても一緒に考えていくことができます。その際、学校だけでなく、他の機関、他の職種と連携することができます。お互いが相互に発信しあえる関係が作れるよう、コーディネーターの役割を果たしていきます。

### ●学校との連携

相談や支援をよりよいものにできるよう、学校生活の様子や取り組みを把握したり、お子さんの課題を説明したりするために学校を訪問することができます。昨年度は144件の学校訪問を行い、先生方と話し合いを持ちました。

### ●福祉サービスに関する相談

療育手帳等の福祉サービスに関する相談は、利用者との貴重な出会いの場、ニーズをキャッチできる場と考えています。悩みや相談を遠慮なくどうぞ。

## 保護者と学校と..

広陵中では自閉症の生徒が入学したのをきっかけに全職員を対象として「自閉症」についての研修会が行われました。アーチルからは「自閉症」についての講話を、保護者からは「宇宙人の行動とその理由」という内容で話がありました。

### 担任の先生より...

「自閉症についての理解が深められただけでなく家庭の様子をうかがうことで、学校以外での姿を知ることもできた。本人とのかかわりをより充実させていく上で、障害や本人の状態像を正しく理解することが何より大切で、今回の研修の意義は大きかった。

学校での本人との直接的なかかわりは、担任を中心としたものにならざるを得ないが、学校全体としても指導体制を整え、他の先生方の協力をいただいている。

就労について

介護の負担が大きくなってきた

本人自身が障害を知った方がいいのか?

高校

進路について相談したい

学校に行きたがらない

こだわりが強くなった

中学校

小学校

適切な就学先はどこ?

集団生活になじめない

放課後、長期休暇の過ごし方..

友達とうまくいかない

学習の遅れが心配

特殊学級の方がいいの?

学校と連携して対応して!

療育手帳が欲しい

# かけはし

「アーチル」とは「アーチ (arch : 橋)」と「パル (pal : 仲間)」とをかけたもので、センターが障害者と市民の「架け橋」になるようにとの願いを込め、市民公募によってつけていただいた愛称です。このコーナー「かけはし」は、読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるよう、皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきたいと思ひます。



## 私のボランティア体験記

アーチルボランティアの永澤直子です。ボランティア活動を本格的に始めて約3か月になります。月に2~3回、療育グループのお手伝いをさせていただいています。絵本やおはなしが大好きな、1児の母です。



実は私の娘(小5)が先天性の病気を抱えていますので、アーチルにはなにかと相談する側でもあります。私も娘もこれまでたくさんの方々に支えられてきました。でも、支えられるだけの一方通行ではなくて、私にもなにかできる事があると素敵だな・・・と思っていました。

そんな時に「アーチルでボランティア養成講座があるよ!」という情報があり14年度の養成講座を受講して、ボランティア登録しました。とにかく小さいお子さんと遊ぶのが好き!ということ以外はなんの特技も持ち合わせていない私です。そんな私でも、ボランティアとして関わらせていただけるのは本当にHappyです。



私がとても大切に考えているのは、お子さん達と遊んでいる時間の中で、楽しい事を共有していくこと。わずかな時間ではありますが、そういう幸せな時間の積み重ねが私に元気を与えてくれています。アーチルボランティアの活動は始まったばかりですが、頼もしい仲間と一緒にこれからも、細く長く続けていきたいと思ひます。

## にゅーす

10月13日に、「軽度発達障害児との早期出会い」のテーマでアーチル療育セミナーを開催しました。会場は、熱心に話に耳を傾ける参加者330名で超満員となり、そうした子ども達のことを「いま知りたい」という方たちがとても多いことを感じました。

また、11月8日に、仙台市の職員研修所を会場に行われた「幼児期から学齢期への移行支援のあり方」について他都市に学ぶシンポジウムには230名が参加。各シンポジストの先進的な理念や実践等に対して真剣な表情で聴き入っていました。そして仙台市での取り組みの充実に期待する熱いメッセージをたくさんいただきました。



これからも、いろいろな研修の機会を作っていきます。ご期待ください。



## 編集後記

初水の便りが届き、季節は冬へと移りつつあるようです。

さて、第3号(特集学齢期)はいかがでしたか? 学齢期とひと口で言っても12年間もあり、初めは「あれもこれも」と欲張りな内容でしたが、最後は「もっと見やすく、読みやすい」という読者の皆様の声に添えるように紙面構成を考えてみました。障害を持つ子ども達への教育は今、大きな節目—特別支援教育への転換—を迎えようとしています(文部科学省のホームページに詳しい説明あり)。アーチル一同、今後も力量アップにつとめていきたいと思ひます。

次号は、3月下旬に発行予定です。(堀越)